

郷土誌だより

いまむら

特集・街道の今昔

No. 5
編集委員会
今村誌刊行会
今村誌発行
瀬戸市平町3-142
電話 (84) 0840
コミュニティセンター内

右村庄屋磯七の他に門七、佐左エ門といった名が記されており、天保十二年の年号も入っている。絵図はかなり正確なもので、瀬戸川と支流、用水路、溜池、周囲の山、村境、神社寺院、耕地の分布、集落、道などを色分けして、ていねいに描いてある。

瀬戸川の北側に一本の往還が東西にのびている。村と村をつないだ道である。この往還から、志段味村道、上水野村道、瀬戸村道、美濃池村道、狩宿村道などが書かれている。

絵図面でみた今村の道

北町共和鉄工あたりから西北にカーブして現・市道新居線につながる。昔は根ノ鼻の松林と急な坂がよく知られていた。尾張旭市北原山まで、道筋だけは残っている。

その先は更に印場、大森、矢田川を渡って大曾根村へと通じていた。この街道、後に瀬戸街道と呼ばれるようになったが、「尾張御行記」(一八二二)では瀬戸街道という言葉は一ヶ所も使われておらず、小幡村、大森村、印場村のところに「信州飯田街道筋」という言葉で詳しく紹介されている。

天保十二年(一八四一)に尾張藩の布令で各村から庄屋が書いて提出した村絵図が、尾張藩庁から東京の徳川林政研究所に引継がれ保管されていることが判ったのでやがて刊行される本には現物の写真を掲載することができると思うが、道を調べる出発点として、先ず、そういう古絵図がある、ということだけここに紹介しておく。

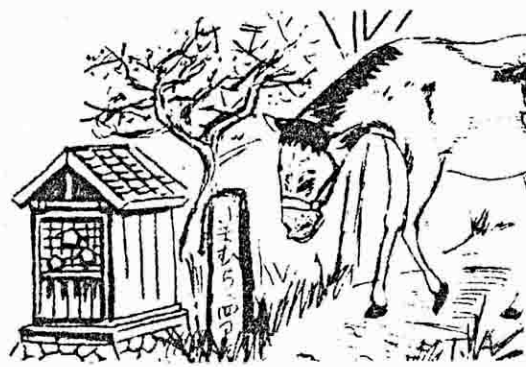
その絵図はタテ四五センチ横約六十センチ程のもので「春日井郡今村絵図」として、

当時の往還は現平町公園南の市道を東へ今春商前へ北脇の効能郵便局前へ孫田、汗干、今池と進んで市役所北門のあたりから二股にわかれ、左(東北方向)へ陣屋頭から品野を経て明智↓岩村へと至る信州道、右へ瀬戸村を経て三河小原村方面へのびる「三州小原道」とに分岐する。これがいわゆる「追分」である。

一方、平町公園から西へ進む道は区画整理で大きく変って昔の名残りをとどめていないが、今の川

中馬(ちゅうま)と中馬街道

今から三百五十年余り前、信州伊那谷の農民たちは、農閑期を利用して飯田や松本の城下町の商人の荷物を自分の馬や牛の背に積んで運搬し、駄賃をもらってぐらしの助けにすることをはじめた。



これが次第に伸びると、一人の馬子(ばこ)が三〜四頭の馬をひき、一匹の馬に二十八貫から三十貫(百〜百十キログラム)の荷をつけ、組を作って街道をかよった。一日の行程が八里(三十二杆)位であったといわれるが、この、信州山間部

の馬の背による運搬業者のことを「中馬」と呼んだ。

中馬の特徴の第一は、品物を生産地から消費地へ直送する、という点であり、これを「通し馬」又は「付通し」ともいった。

これらの中馬が信州から尾張、三河に下る道を三河地方では「飯田街道」と呼び、信州の人々はこれを「三州街道」と呼んでいたようだが、この道は中馬の往還であった所から、「中馬街道」と呼ばれるようになったものである。

さて、この中馬、商品流通が盛んになるにつれて仲間も増え、飯田へは一日に馬千匹入って千匹出るといわれ、中馬街道筋六七八ヶ村、馬数一万八千余にも及んだので、当然のことながら尾張、三河地区にも大きな影響をもたらすことになった。このような流通の拡大で、三河の農民の間にも馬稼ぎをはじめものが増え、本場の中馬との間に争いが起きて、文政三年(一八二〇)遂に幕府が仲裁に入り、三州馬の頭数や参加する村を制限してしまった。さあこうになると今度は輸送力が不足することになり、短距離や中継ぎ専門の、朝出て夕刻に帰る日戻りの馬稼ぎが各地にあらわれるようになる。

中馬の背による運搬業者のことを「中馬」と呼んだ。

中馬の特徴の第一は、品物を生産地から消費地へ直送する、という点であり、これを「通し馬」又は「付通し」ともいった。

これらの中馬が信州から尾張、三河に下る道を三河地方では「飯田街道」と呼び、信州の人々はこれを「三州街道」と呼んでいたようだが、この道は中馬の往還であった所から、「中馬街道」と呼ばれるようになったものである。

さて、この中馬、商品流通が盛んになるにつれて仲間も増え、飯田へは一日に馬千匹入って千匹出るといわれ、中馬街道筋六七八ヶ村、馬数一万八千余にも及んだので、当然のことながら尾張、三河地区にも大きな影響をもたらすことになった。このような流通の拡大で、三河の農民の間にも馬稼ぎをはじめものが増え、本場の中馬との間に争いが起きて、文政三年(一八二〇)遂に幕府が仲裁に入り、三州馬の頭数や参加する村を制限してしまった。さあこうになると今度は輸送力が不足することになり、短距離や中継ぎ専門の、朝出て夕刻に帰る日戻りの馬稼ぎが各地にあらわれるようになる。

中馬も通った 今村の道

飯田街道の根羽から岩村↓明智
↓品野を経て今村を通り、新居、
大森から名古屋へ通ずる旧瀬戸街
道はいわゆる本街道の飯田街道で
はないが飯田へ通ずる主要支線の
一つであったので「飯田道」とよ
ぶこともあったらしく、事実、荷
物の都合などで中馬が通うことも
確かであった。そこでこの道筋が
中馬街道と呼ばれることもあった
ようだ。戦後、郷土史の研究が進
み古文書も発見されてそういつた
ことが明らかになり、例えば土岐
市史(昭四六)尾張旭市誌(同)
北設楽郡史(昭四五)日本の塩道
(富岡儀八著昭五三)などにも記
載されているし、文化庁篇の「中
馬の習俗」二四頁の中馬の路線図
にもはつきり記されている。

テモ馬持タルモノハ駄賃ツケシテ
渡世ノ助ケトセリ」とある。そし
て瀬戸村を見ると「近村ニテハ陶
器駄賃著ク以テ生産ノ助ケトス、
今村、菱野、本地、新居、印場、
小幡、大永寺、大森垣外アタリヨ
リノ村人駄賃著ク来レリ中ニモ今
村、小幡ヨリ多ク来レルト」と記
して、今村にも結構駄賃馬がいた
ことを示している。

こう書き記している。
「コノ村ハ瀬戸川ヨハサンデ農家
アリ、四区ニ分ル。寺山、市場、
北脇、川西ナリ。寺山、市場ハ瀬
戸川ノ南ニアリ、コレ本郷ナリ」
寺山と市場は、今村で最初にひ
らけた土地であったことがこれで
わかる。氏神様もお寺も川南にあ
るのは当然の話である。

一方、川の北には信州と尾張を
結ぶ街道が通っていた。
街道筋では通行人の便宜を図る
ために休み所が出来る。茶店、煮
売屋、馬宿や旅人宿、問屋、かじ
屋もそうめん屋も呉服屋も風呂屋
も床屋も、いつのまにか自然に出
来て一つの町を形成する。根羽、
柿野、足助、新城などはこのよう
にして生れ、中馬の中継地として
或は旅人の宿駅として繁栄した町
である。品野もその一つである。

瀬戸街道には二つの難所があっ
た。一つは矢田川を渡ることも、
う一つは根之鼻の急坂をこえるこ
と、名古屋から来て根ノ鼻の坂を
こえると今村の川西嶋である。い
つとはなし、ここにいろいろな店
が生れた。古老の話やその家に伝
わる口伝で明らかになったものに
例えば広さんの菓子御前、和右エ
門さんの宿屋「しげりや」、勝重
さんの馬宿、利兵衛さんの問屋、
藤太郎さんの宿「坂本屋」柳左エ
門さんの煮売屋などがこの街道筋
にあった。農業のかたわら街道で
商いをする家が増えて、この道筋
を今村の中で特に「街道島」とよ
ぶようになったという。

尾張旭市誌によれば、水野代官
所は天保十二年(一八四一)「土
品野市馬駄賃馬新古馬子荷物附方
出入の件」について今村、本地村
美濃之池村、菱野村、狩宿村、井
田村、瀬戸川村、稲葉村、新居村、
印場村、大森村、小幡村、猪子石
原村の十三ヶ村の馬子総代と、か
かり合いの者および庄屋の出頭を
命じたこと、その後始末のことを
郷土史料の印場村文書によつて明
らかにしている。

なお、「市馬」について「馬子
自らが商人であるかまたは販売を
委託されたところからつけられた
ものであるう、いづれにせよ市馬
は、塩や林産物の生産地または問
屋と、交易場所である品野とを往
復する馬隊ぎである」と説明され
ている。

結ぶ街道が通っていた。
街道筋では通行人の便宜を図る
ために休み所が出来る。茶店、煮
売屋、馬宿や旅人宿、問屋、かじ
屋もそうめん屋も呉服屋も風呂屋
も床屋も、いつのまにか自然に出
来て一つの町を形成する。根羽、
柿野、足助、新城などはこのよう
にして生れ、中馬の中継地として
或は旅人の宿駅として繁栄した町
である。品野もその一つである。

瀬戸街道には二つの難所があっ
た。一つは矢田川を渡ることも、
う一つは根之鼻の急坂をこえるこ
と、名古屋から来て根ノ鼻の坂を
こえると今村の川西嶋である。い
つとはなし、ここにいろいろな店
が生れた。古老の話やその家に伝
わる口伝で明らかになったものに
例えば広さんの菓子御前、和右エ
門さんの宿屋「しげりや」、勝重
さんの馬宿、利兵衛さんの問屋、
藤太郎さんの宿「坂本屋」柳左エ
門さんの煮売屋などがこの街道筋
にあった。農業のかたわら街道で
商いをする家が増えて、この道筋
を今村の中で特に「街道島」とよ
ぶようになったという。

品野村、赤津村、瀬戸村で焼かれ
る陶器を尾張公の城下町へと運ん
だことだろう。
街道といつても、今、私たちの
イメージにある道路とは程遠い、
けもの道に毛の生えたようなもの
だったのであろう。そんな道を、
天秤棒で肩にかついで、或は馬の
背にくくりつけて、せとものが西
へ東へと送り出されていった。
いつしかこの街道が、もはや中
馬街道でもなく飯田みちでもなく
もつばらセト街道と呼ばれるよう
になったのはごく自然のなりゆき
であったに違いない。
沿道の村人の生活をうるおし、
日本中の人々の暮らしの中へ「せと
もの」を送りつづけた一本の道、
瀬戸街道も、明治九年の大政官布
告によつて改修が進められ、やが
て大八車が出現し、馬車も通れる
ようになって、農家の副業として
はじまった運送は次第に專業化し
ていく。当時は一往復二日かかり
であったため宿屋や茶屋もでき、
いろいろな商家が並ぶようになって、
川西嶋が「街道島」と呼ばれ
るようになるのである。

「市馬」について「馬子
自らが商人であるかまたは販売を
委託されたところからつけられた
ものであるう、いづれにせよ市馬
は、塩や林産物の生産地または問
屋と、交易場所である品野とを往
復する馬隊ぎである」と説明され
ている。

結ぶ街道が通っていた。
街道筋では通行人の便宜を図る
ために休み所が出来る。茶店、煮
売屋、馬宿や旅人宿、問屋、かじ
屋もそうめん屋も呉服屋も風呂屋
も床屋も、いつのまにか自然に出
来て一つの町を形成する。根羽、
柿野、足助、新城などはこのよう
にして生れ、中馬の中継地として
或は旅人の宿駅として繁栄した町
である。品野もその一つである。

瀬戸街道には二つの難所があっ
た。一つは矢田川を渡ることも、
う一つは根之鼻の急坂をこえるこ
と、名古屋から来て根ノ鼻の坂を
こえると今村の川西嶋である。い
つとはなし、ここにいろいろな店
が生れた。古老の話やその家に伝
わる口伝で明らかになったものに
例えば広さんの菓子御前、和右エ
門さんの宿屋「しげりや」、勝重
さんの馬宿、利兵衛さんの問屋、
藤太郎さんの宿「坂本屋」柳左エ
門さんの煮売屋などがこの街道筋
にあった。農業のかたわら街道で
商いをする家が増えて、この道筋
を今村の中で特に「街道島」とよ
ぶようになったという。

品野村、赤津村、瀬戸村で焼かれ
る陶器を尾張公の城下町へと運ん
だことだろう。
街道といつても、今、私たちの
イメージにある道路とは程遠い、
けもの道に毛の生えたようなもの
だったのであろう。そんな道を、
天秤棒で肩にかついで、或は馬の
背にくくりつけて、せとものが西
へ東へと送り出されていった。
いつしかこの街道が、もはや中
馬街道でもなく飯田みちでもなく
もつばらセト街道と呼ばれるよう
になったのはごく自然のなりゆき
であったに違いない。
沿道の村人の生活をうるおし、
日本中の人々の暮らしの中へ「せと
もの」を送りつづけた一本の道、
瀬戸街道も、明治九年の大政官布
告によつて改修が進められ、やが
て大八車が出現し、馬車も通れる
ようになって、農家の副業として
はじまった運送は次第に專業化し
ていく。当時は一往復二日かかり
であったため宿屋や茶屋もでき、
いろいろな商家が並ぶようになって、
川西嶋が「街道島」と呼ばれ
るようになるのである。

品野村、赤津村、瀬戸村で焼かれ
る陶器を尾張公の城下町へと運ん
だことだろう。
街道といつても、今、私たちの
イメージにある道路とは程遠い、
けもの道に毛の生えたようなもの
だったのであろう。そんな道を、
天秤棒で肩にかついで、或は馬の
背にくくりつけて、せとものが西
へ東へと送り出されていった。
いつしかこの街道が、もはや中
馬街道でもなく飯田みちでもなく
もつばらセト街道と呼ばれるよう
になったのはごく自然のなりゆき
であったに違いない。
沿道の村人の生活をうるおし、
日本中の人々の暮らしの中へ「せと
もの」を送りつづけた一本の道、
瀬戸街道も、明治九年の大政官布
告によつて改修が進められ、やが
て大八車が出現し、馬車も通れる
ようになって、農家の副業として
はじまった運送は次第に專業化し
ていく。当時は一往復二日かかり
であったため宿屋や茶屋もでき、
いろいろな商家が並ぶようになって、
川西嶋が「街道島」と呼ばれ
るようになるのである。

本郷と街道嶋

「洵行記」で樋口好古は今村を

「市馬」について「馬子
自らが商人であるかまたは販売を
委託されたところからつけられた
ものであるう、いづれにせよ市馬
は、塩や林産物の生産地または問
屋と、交易場所である品野とを往
復する馬隊ぎである」と説明され
ている。

結ぶ街道が通っていた。
街道筋では通行人の便宜を図る
ために休み所が出来る。茶店、煮
売屋、馬宿や旅人宿、問屋、かじ
屋もそうめん屋も呉服屋も風呂屋
も床屋も、いつのまにか自然に出
来て一つの町を形成する。根羽、
柿野、足助、新城などはこのよう
にして生れ、中馬の中継地として
或は旅人の宿駅として繁栄した町
である。品野もその一つである。

瀬戸街道には二つの難所があっ
た。一つは矢田川を渡ることも、
う一つは根之鼻の急坂をこえるこ
と、名古屋から来て根ノ鼻の坂を
こえると今村の川西嶋である。い
つとはなし、ここにいろいろな店
が生れた。古老の話やその家に伝
わる口伝で明らかになったものに
例えば広さんの菓子御前、和右エ
門さんの宿屋「しげりや」、勝重
さんの馬宿、利兵衛さんの問屋、
藤太郎さんの宿「坂本屋」柳左エ
門さんの煮売屋などがこの街道筋
にあった。農業のかたわら街道で
商いをする家が増えて、この道筋
を今村の中で特に「街道島」とよ
ぶようになったという。

品野村、赤津村、瀬戸村で焼かれ
る陶器を尾張公の城下町へと運ん
だことだろう。
街道といつても、今、私たちの
イメージにある道路とは程遠い、
けもの道に毛の生えたようなもの
だったのであろう。そんな道を、
天秤棒で肩にかついで、或は馬の
背にくくりつけて、せとものが西
へ東へと送り出されていった。
いつしかこの街道が、もはや中
馬街道でもなく飯田みちでもなく
もつばらセト街道と呼ばれるよう
になったのはごく自然のなりゆき
であったに違いない。
沿道の村人の生活をうるおし、
日本中の人々の暮らしの中へ「せと
もの」を送りつづけた一本の道、
瀬戸街道も、明治九年の大政官布
告によつて改修が進められ、やが
て大八車が出現し、馬車も通れる
ようになって、農家の副業として
はじまった運送は次第に專業化し
ていく。当時は一往復二日かかり
であったため宿屋や茶屋もでき、
いろいろな商家が並ぶようになって、
川西嶋が「街道島」と呼ばれ
るようになるのである。

八間道路と 県道主要地方道

瀬戸街道が、せともの道とし
て重要性をもつてくると、沿道は

にぎやかになってきた。昔、本郷だった、川の南の市場、寺山の地域をふまえて瀬戸の将来をも考え合わせて瀬戸町との合併、そして、道路の整備を話し合っていた時、大正十四年の水害となった、復旧を兼ね、耕地整理事業がはじまった。

中員八間、(約十五メートル)の道路が新設された。当時、八間道路というのは画期的なもので、人々を驚かせた。がこの八間道路の両端は、古い道で、十分なたらしきをしなかつたので、真ん中だけが使われ、生活道路でしかなかつたから、一時は悪評が高かつた。昭和十四年頃から、隣の旭町で、県道、名古屋―瀬戸線の改修のための土地買収がはじまり、十二年末には共栄橋が改築され、十八年末に、県道、名古屋瀬戸線の間線変更が行われ、共栄橋―八間道路が、県道となった。三十一年四月から、県道、主要地方道名古屋瀬戸線と改称され今日になった。

ガスの道

IIせと所々今昔物語からII

旧瀬戸街道には、名古屋市呼統にあつた名古屋ガス会社のタンクから、現在の陶本町、福よし旅館廻りにできたタンクへガスを送るための鉄管が通つていた。時は、

大正元年(一九一二)のことである。十一月頃から瀬戸の町にも、ガスが供給されることになったが、永い間のくらしの中で見付けた燃料のイロキ、マキの生活から切りかえるには時間が必要で、ガス事業はのびなやみの状況であつた。ちやうどそんな頃、第一次世界大戦がおこり、鉄材の値上り、ガス管を掘つて売つた方が利益があると、大正八年十月二十二日に廃止となつた。そしてあの第二次世界大戦後、日本が高度成長時代に突つた三十三年にはガス導入の世論調査も行われ、三十四年には、市と商工会議所、連合自治協議会の三者により準備が進められ、三十五年四月から東部ガス株式会社によりガス供給がはじまつた。

守山の瀬古にある、ガスタンクから、県道の主要地方道名古屋瀬戸線の地下が利用され、共栄町一丁目に、同社の瀬戸サービスセンターがおかれている。事業開始時には一千戸、現在は一万三千戸に使われている。

郷土の文化財 今村の石造物

どこへ行つても、その土地に住みついていた人々の、長い長い暮らしの歴史の中から自然に生えたような石仏や碑のひとつや二つはあ

るものだ。今村にだってそんな石造物があつてもいい筈だ、と思つて調べにかかつたら、なる程あつた。ここに紹介するのはその中間報告である。昔、旧瀬戸街道を西からやつて来て根ノ鼻の急坂を上り切るとそこに馬の水飲み場があつたという。その近くに駒が二つに割れた馬頭観音がある。道中馬の安全と供養のために祀られたものだろう。現存は最初あつた位置から少し昇つていようと思うが、西山町の、誰か作つたか小きな祠に安置されている。

又、北脇公民館前には、舟形光背に道しるべを刻んだお地藏さんがある。左いいだへ、右〇〇へ、この右の〇〇が全く風化してしまつて判読できない。これもどこかにあつたのを、ここへ移し祀つたものであることは間違いないが、どこにあつたのだろうか。左いいだへ、というのとひよつとすると追

分の辻に西向きに立てられたものか……右側がより強い風雨にさらされる所にあつたのだろうか、もしこの地藏が最初どこにあつたのか、ご存じの方はぜひ教えて頂きたい(写真)。背面に度徳元丑七月吉日と彫つてある。一八六五年今から百十五年前のものである。

道標としては寺山のお天王さんの前に一本、右やまみら左あきは道、というのが立つてゐるがこれも位置は少し違つてゐる。

寺山、市場といえは今村の本郷だけに歴史は古く、今村全村にある石灯籠九基のうち七基までが寺山と市場に集中しており、最も古いのは八王子神社に「御神前」と刻まれたもので明和六年(一七六九)、これについて古いのが市場弘法堂前の寛政十二(一八〇〇)年のものである。三番目が平町弘法堂の天保十四年(一八四三)四番目は寺山辻の嘉永三年(一八五

○)その次が北脇の文久二年(一八六二)あとは皆大正以後だ。瀬戸川畔新築橋の東に明和四年(一七六九)の水神があつて鈴木利兵衛の名が入つてゐる。二百余年も前のものだ。これよりは新しいが八王子神社のお堀にも二基の水神がひっそり立つてゐる。

これらの他に、歴史を伝える碑文もいくつがあるが、それは又稿を改めて紹介する機会もあるうかと思つたのでここでは割愛する。

平町三丁目にある お地藏さん

横山メッキ工業所、北側の道端にいつもきれいに祀られて、道ゆく人々の交通安全を見守つて、あふれる慈眼のまなざしをそゝいでおられるお地藏さんがある。

こゝにこうしたお地藏さんができたのは、昭和十六年二月八日のこと、鈴木重四郎さん(故人)の四男 正美ちゃん(五才)が、踏切りの北側にある親類の鈴木九一郎さん(故人)の家に遊びにいった帰りに、電車にはねられて死亡するという痛しい事故があつた。九一郎さんが、その供養のためにお祀りされたものである。以来近所の鈴木えつさん、横山とし子さんらの熱いお祈りと供花が続けられてゐる。



(北脇町のお地藏さん)

〔連載〕

広長公物語 (5)

(一) その夜 ②

幻

時の経過を辿ってみると、十五年前に都で発火した「応仁の乱」の余燼は日本全土に拡大して、こゝ尾東の地、今村城も例外ではなかつた。

この時より凡そ百年近く、織田信長が「天下布武」の朱印状を散す、天正始めの頃迄所謂戦国の世は続いて、竜虎相打つ決戦が各地に展開した。流血の乱斗、怖畏逼迫の悪業は繰返えされ、百姓万民は、生死地獄の呻吟に苦しんだ。

この日、安土坂の決戦もその序幕一コマと謂えよう。

世の中は常なきものと知りつ、も虫けらの様に耐え、雑草の様に踏まれても生き抜かねばならない

老い先も短くなつた主膳ではあるが、心魂は若やいで眼は光る。主膳の屋敷、その奥方「ぬかた」の部屋に伏しまどろむお鶴の方、日は西に落ちて、月こそ丸く猿投の山に顔を現す。燈心草も短く行燈の影もほの暗い。幽魂はお鶴の方を招く。

現とも夢とも知れぬ幻想の雲が

あたりに纏引いてふんわりとした霞に包まれた殿がにっこりと微笑む。瀬戸川の水も温りを増し、川柳もふつくらと白く、葎の紫も、たんぼの黄色も、連華の紅も、眩しく目を射る。

花園を渡るかすかな風も、頬を掠めて甘い。雲雀の囀も高く、又近くに、猿投の山も春の色が盛く、身も心も湧き立つ夜の中に、お鶴の方を顧みて、又もにっこりと微笑む広長公。綾蘭笠に狩衣袴を着こなした馬上の英姿は呼ぶ。

「お鶴！お鶴！」と。殿のお姿はぼんやりと、次第にはつきりと眼に映る。駆け出すお鶴の方、仲々に足が出ない、薄衣がはなれぬ思いに纏はれて、駆けても、走り出しても、殿との隔りは遠くなるばかり。

「お鶴！早く参らぬぞ、早く、もつと早く！」手足は空を騒がせて心はもだえにもだえた。がその時「ゴウ」という響きと共に瀬戸川の早い流れはお鶴の方を呑む。

あわや、正気を失いそうになつた其時、いしくも駆け寄つた殿、「お鶴、しつかり致せよ、わしだ」と殿の声と共に、両腕に支えられた。

濡れた肌は、しつかりと抱きか

満れた肌は、しつかりと抱きか

かえられ、ぐつたりとした体も少しぼし殿の血潮の温りを受けて、臆も直になる。

漸してにっこりと殿を見上げるお鶴の方、右の手を殿の肩に掛け乍ら首を左右に軽く振る。烏髪は光さへ添え、殿の掌に在つて、眼は愛苦しく濡れた。白い柔肌は胸深く躍動して、魂は燃え盛つた。

長い時がずっと続いてきた様に思はれ、やがて軀を殿に預けてお鶴屋敷に戻つた。

「のう！お鶴、わしはのうお鶴、お鶴にすまんと思うぞ、お前の殿として、足りなかつた事を悔いて許してくれよ、のうお鶴、今迄おれは領民の事で頭が一杯だつた。どうかかして米や麦の収穫が上る様に、なりわいが楽になる様にと考え、年々の高に應じて取筒を加減していても、他領の分は否応なしに目代が取り立る仕末、少しでも山を増やしてやろうと、瀬戸川の氾濫を防いだり、雨池を一つでも多く造つて、秋穂作りの指図も喧嘩の無い様にと考えている事を、今村の人達は今もよく知つていてくれるが、あゝ！もう今となつては、何もかも出来なくなつて了つた。

領民の衆よ、許せよ、おれの氣

持もわかつてくれたのう、お鶴、今宵はおことの側でゆるりとしようぞ、お鶴、お鶴！もうそと側に寄つて来てくれ。

お鶴の方は静かに膝を進めて摺り寄ろうとするが、体は仲々に前に出ない。焦りは募るばかり、かすれた声もいじらしく、「殿！殿！殿」と、叫べど、手足を腕いても殿との隔たりは離れるばかり、焦燥はもだえになる。もだえ盛るお鶴の方、「殿！殿！」薄衣も掻き裂かんばかりに狂う。胸の脈も頭にも乱れて、求めようとする閻浮の妄執か、求められようとする狂乱か、半裸のお鶴の方のもだえ、魂が浮かぶ幻か、軀を焦す噴毒の火か、部屋中に狂う。殿を呼ぶ声もうすれて、やがて阿字を発する最後の呻き。

今は静かに満ち足りた様に乱舞は止んだ。そして魄霊の影は消えた。侍女おたきの膝の上に忠兵衛、菓子台の餅を焚いても、唯首を左右に振る。忠右エ門を両の手にぬかたは、傍の主人に「いかゞ致しましよ」と、「うか」と一言、主膳は席を立てて表の部屋へ去つた。矢野典医は側に寄つてお薬水を焚めた。

五月半ば、きぬぎぬに妹背を惜み、枕を濡す怨みはまた待つ宵も消えて、あかぬ別れの音信の声は早苗に舞う螢の光りか、初夏の香を含む夕闇の風は、お鶴の方の乱れ髪をかすかに撫でる。

その頃、草に結ぶ露を舐つて足早に急ぐ一団は松原盛重を先頭に美濃之池に向つていた。一方焼け落ちた今村城をじつと見詰めて佇む一人の修行者があつた。黒衣に殿頭笠も深く、数珠を揉み乍ら「なまいだぶ、なまいだぶ」と。

お寺の鐘か、「ゴオン、ゴオン」とあたりの無言を破つて響く。

今日文明十四年五月十五日、雲間の望月が静かに先を投げ懸ける。

(白水郎)

資料提供者御芳名(敬称略)

- 大瀬戸新聞社○丸五運送若杉博
- 瀬戸市土木課○同稅務課○名古屋土木事務所○東邦ガスKK瀬戸サービスセンター
- 西脇俊一 長谷川義雄
- 浅野繁太郎 水野武雄
- 青山健夫 青山富一
- 伊藤市郎 鈴木正人
- 青山光夫 青山 登
- 加藤つき 鈴木えつ
- 小島 操 西田 馨
- 青山一 横山春一
- 鈴木藤一 横山金録